

国文学研究資料館報

第17号
昭和56年9月

ソ連における日本文学研究

V・N ゴレグリアード

本日は、「ソ連における日本文学研究」についてお話しすることになっておりますが、最初に、帝制ロシアとソ連邦における日本文学の発生と発展の主要な段階について簡単に申し上げます。

最初にロシアに渡った日本人は、伝兵衛といいました。彼は一六九七年にカムチャッカへ漂流したので、そして一七〇三年に、ピョートル一世に拜謁しました。その時ピョートル一世は、モスクワに日本語学校を設立することを命じました。しかし実際には、最初の日本語学校は、一七三六年にベテルブルグに設立されました。その日本語学校の教師は三人で、その内の二人は、ソザとゴンザという日本の漂流民でした。

ソザは四十歳、ゴンザはわずか十四歳だったということです。二人とも漢字はあまりよく知りませんでした。三人の教師の内、もう一人は、アンドレ・ボグターノフというロシア人でした。彼は、ソザ、ゴンザと共に、日本語の教科書や、ロシア文字で書かれた日本語の辞典を作り、翻訳も行いました。

十八世紀の終りに、この学校は、イルクーツクに移転しました。そこでは、日本語学校は航海学校の一部になり、その学校の卒業生は、航海士として、オホーツク海方面の船上勤務をしておりました。

イルクーツクの日本語学校の教師は、アンドレイ・タターノフで、一七八二年に日露辞典をつくりまし

たが、それは数字以外はロシア文字で書かれていました。

同じ一七八二年に、大黒屋光太夫という商人が写本と木版本をもってきました。その中には浄瑠璃の本もありました。彼は、ヤンキエビチ・デ・ミリエポーという人が全世界の言語の辞典をつくるための資料としてそれらを提供したのでした。

一八〇四年に、ニコライ・レザノフというロシアの大使が日本語の教科書と辞典をつくりました。これは、外国でつくられた日本語の教育用マテリアル(教科書や辞典)としては最初のものでした。この文献がもっているもう一つの重要なことは、

ここで使われている日本語は東北地方の方言で、それがロシア文字で書かれていたことです。ロシア文字の方が、平がなで書かれたものよりはるかに正確に発音がわかるので、今日これは方言研究の重要な資料となっています。

一八一八年に、ベテルブルグのア

次一

ソ連における日本文学研究

V・N ゴレグリアード 1

海外資料収集のためのリスト・情報
の入手について(お願) 4

北欧の旅…………… 小山弘志 5

新収資料紹介⑧…………… 7

評議員・委員・調査員名簿…………… 8

文献資料部事業報告…………… 福田秀一 10

研究情報部事業報告…………… 小山弘志 11

整理閲覧部事業報告…………… 本田康雄 12

共同研究…………… 14

研究者カードへの御協力のお願…………… 14

利用者へのお知らせ…………… 15

昭和五十六年度秋季学会開催一覽…………… 16

カデミーに、アジア博物館が設立され、各所に保存されていた東方諸国の貴重な美術品が集められました。

その中には、大判、小判、写本、木版本などがありました。しかしここには日本語の専門の人はいなかった。外務省の中国語専門のカメンスキーとリポフツイエフの二人が目錄をつくっていました。

日本が開国して新しい段階を迎えてからは、プチャーチン大使のあと函館領事となったイオシフ・ゴシキエービチが日露辞典をつくり、印刷出版されました。ゴシキエービチは歴史、文学、宗教関係の写本や木版本を収集しました。

一八七〇年代にベテルブルグ大学に日本語の講座ができました。一八九九年にはウラジオストックに東洋大学ができました。ここでの専門家は、スパリーリン、メーンドリン、マツオーキンの三人で、スパリーリンはベテルブルグ大学の卒業生であり、他の二人はウラジオスト

ックの東洋大学の卒業生でした。

この頃までは、日本の文学も、大部分は英語から翻訳されていましたが、19世紀の終りから20世紀の初めになると、一部分は日本語から直接翻訳されるようになりました。その中には、「日本書紀」、「竹取物語」(「竹取物語」は革命前に四回翻訳されています)、「日本書紀」、「今昔物語」、「徒然草」、「八犬伝」、「雨月物語」がありますが、歌集も一八九六年、一九〇五年、一九一二年に出版され、その中には、「新古今集」、「古今集」、「万葉集」、「百人一首」の和歌が訳されています。

一九〇四年には、ウラジオストックでアストンの「日本文学史」が翻訳されました。

一九〇九年には、ハバロフスクで「現代日本詩歌史の要約」という本がクシミードフによって出版され、一九〇五年にはボズニヤコーフがモスクワで「日本詩歌」という本を出しました。また同じ一九〇五年には「日本の心」という論文がペテルブルグで出版されました。これらを見ると、日露戦争の時に最も多く翻訳や出版がなされていたことがわかります。

一九一〇年代には、ウラジオスト

ックとペテルブルグの大学で、ローゼンベルグ——この人は仏教を研究していましたが若くて亡くなりました——、エリサーエフ、コンラド、ネフスキーが日本語と日本文学の教育と研究を行っていました。

革命後は、一九二〇年代に、東洋学者総委員会が設立され、一九二五年から一九三〇年まで「総委員会ノート」を出しました。

一九二一年には、全ロシア東洋学者研究会が設立され、「新東方」という雑誌が出されました。

図書では、

一九一八年、ローゼンベルグの「仏教哲学の諸問題」

一九二二年、エリサーエフの「日

本文学」

一九二三年、コンラドの「日本国

民と國家」

一九二七年、コンラドの「日本と

日本文学」

が出版されました。

一九三〇年から一九三八年の間に、科学アカデミーは再組織され、全国の科学研究を総括する組織となり、各地に支部を設立しました。

一九三〇年にレニングラードでは、仏教文化研究所と、東洋学者総委員会とトルコ学研究室が合併して、東

洋学研究所が設立されました。

この研究所には十一の研究室があり、日本学は、日本朝鮮研究室で、コンラドの指導のもとに、言語、歴史、文学が研究されていました。主な研究者は、コンラド、ネフスキー、フェーリドマン、グルースキナ、コルバクチャー、ジュエーフ、ホロドービチ、などでした。

戦前には日本学の主な発表雑誌は三つありました。一つは「東洋学研究所ノート」で、一九三二年から三九年の間に七冊刊行されました。第二は同じ研究所の研究紀要で、一九三五年から四六年までに四六冊刊行されました。三番目は同研究所の論文集で四〇年代に出版されました。

戦前のソ連の日本学研究には三つの方面がありました。一つは各分野の専門家による日本研究で、コンラド、フェーリドマン、グルースキナなどが研究を行っていました。第二はソ連における日本研究計画で、古典の主な文学作品を選び、計画的に翻訳を進めることでした。しかし戦争のため専門家が失われ、この計画はあまり実行されませんでした。三番目は文学研究で、これには文学作品を部分的に翻訳紹介することとフ

ロレタリア文学を翻訳研究するという二つの流れがありました。この方面の主な研究者はフェーリドマン、キムなどです。

戦後は、東洋学研究の中心は、次にレニングラードからモスクワに移り、一九五〇年に東洋学研究所の本部もモスクワに移り、レニングラードには写本部だけが残されました。その後一九五六年に、この写本部は、モスクワの東洋学研究所のレニングラード支部になりました。

このほか、東洋学研究の中心は、モスクワの世界文学研究所、モスクワ大学、レニングラード大学、ウラジオストクの極東大学です。また各地の図書館、美術館、大学にも、日本文化研究の専門家があります。

たとえばデリューシナさんは「源氏物語」、レチコーさんは狂言や井原西鶴の研究、シサウーリさんは「宇津保物語」の翻訳を、エルマコーワさんは「大和物語」の翻訳をしています。現在は「祝詞」の研究をしています。またロトンスカヤさんは児童文学の翻訳をしています。

モスクワの東洋学研究所にはポポフさんがいます。彼は「風土記」の研究者です。グルースキナさんは「万葉集」の翻訳書を出していますし、

最近では和歌全般にわたって研究しています。グリゴリーエワさんは鎌倉時代から幕末までの文学を研究しています。現在は私と一緒に日本文学史を書いていきます。ロクノーフさんは日本の民衆文学、プロレタリア文学の研究者、マモノフさんは近代詩の研究者です。ドーリンさんも日本詩の専門家で新体詩を研究しています。メツシエリヤコフさんは、神道の研究者でしたが今、「日本靈異記」の翻訳をしています。

レニングラード支部では主に日本古典文学を研究しています。私の研究テーマは、日記、随筆文学でしたが、現在は日本文学史を執筆中です。イワノーフさんは明治・大正の文学の研究者で最初の論文は幸徳秋水に関するものでした。森鷗外についても研究しています。それからスピリドフさんは最初「宇治拾遺」を、その後説話文学全般の問題を研究しています。カパーノフさんは五山文学を思想的、文化的、美術的な各方面からとり上げ、特に中国と日本の相互の美術交渉をテーマに選んでいます。

モスクワの世界文学研究所ではキム・レホさんが、現代の日本の短編小説の研究をしています。ポロニー

ナさんは「日本古典詩歌論」という本を出していますが、最近「源氏物語」を研究しております。モスクワ大学の日本講座の教授ではグリヴニンさんが芥川龍之介、島崎藤村、川端康成の翻訳をしています。リボワさんは「平治物語」の翻訳、マールコワさんは俳句や近松門左衛門のもの、の翻訳をしています。リャーブキンさんは言語学の専門の人ですが、シエフテレビチさんと芭蕉の研究をしています。

レニングラード大学の先生では、科長のピヌスさんは日本文学全般に及んでいますが特に「古事記」の研究をしています。プガーエワさんは明治・大正文学思想の専門、マクシモワさんは戦後文学を専攻しています。

ウラジオストクの極東大学は、主として教育だけを行うところですが、プレスラーベツという人が芭蕉の研究をしています。

戦後の研究の動向を見ると、戦後十五年位の間は、主として民衆文学が研究されました。この流れの中心は、ログノーフさん、グルースキナさん、フェーリドマンさん、イワネンコさん達です。それから、ロシア文学の日本文学への影響というこ

とも研究されました。その中心はピヌスさん、コンラドさん、カールリナさん達です。

一九六〇年代から現在までの期間には、日本研究の専門家も多くなりました。それで個々のこまかい問題が研究されるようになりました。また古典文学の翻訳もよく行なわれるようになり、一般の雑誌にも掲載されるようになりました。そのような文学雑誌の中で、一番重要なものは「外国文学（イノストラナヤ・リテラトゥーラ）」という雑誌です。

さて、最後に、ソ連における日本文学研究の一般の問題についてお話します。

まず第一は翻訳についてです。古典文学の研究は、一九七〇年代までに、「万葉集」三冊、「枕草子」、「風土記」三冊、「徒然草」、「竹取物語」、「落窪物語」、芭蕉の俳句二冊、西鶴もの二冊、謡曲、近松もの一冊、「祝詞」などが出版されました。こういう翻訳には二種類のものがあって、この二つは出版社によっても、また方法によっても区別されます。一つは研究翻訳で、他の一つは文学的翻訳です。研究翻訳は、主として科学アカデミーの出版部から出されています。文学的翻訳というのは、一般

市民のためにわかりやすく翻訳してあるものです。たとえば「落窪物語」の翻訳ですがこれは文学的な翻訳では、主人公の名前がわかりやすいように一つの名前で通されています。

しかし一方研究翻訳では、たとえば「万葉集」の翻訳のように翻訳のほかに論文と注釈とが付されています。このような研究翻訳では、「古事記」「土佐日記」、「大和物語」、「遺物語」、「源氏物語」、「落窪物語」、「平家物語」、「日本靈異記」などが近々出版されます。

つぎに研究そのものについていいますと、まず一九七〇年代の初め、コンラドさんが日本文学関係の論文集「古事記から徳富まで」三冊を出しました。最近ではポロニーナさんの日本古典詩学の本が出ました。これは、奈良、平安時代の和歌の研究で、文学的問題、歌作の方法、歌枕ことば、縁語、本歌取りなどについても言及しています。

それから駐日大使だったフェドレンコさんが「川端康成」という本を出していますが、これは自分が日本文化による影響を受けたことを一つのメインモチーフとして書かれています。

これらの研究論文にも二つの方向

があります。一つは文学本来の問題であり、もう一つは日本文学と日本文化の交渉の問題、思想と美術との関係などの問題を研究したものです。

東洋学関係の専門的学術雑誌は、「アジア・アフリカの諸民族」というものです。この雑誌には主として現代の問題が扱われています。古典の研究はいろいろな研究会で発表されます。私の研究所では、研究成果の発表会が毎年あり、モスクワ大学では、日本語と日本文学の研究会が二年に一回ひらかれ、レングラーとウラジオストクの大学も参加します。またレングラーでは、東洋学研究所とレングラー大学が合同で二年に一回、東洋学研究会議が行なわれます。そしてこれらの研究会議の記録が出版されます。

一九七三年からは「日本」というタイトルの年鑑が出されていて、その中に日本文学についての論文がはいっています。

以上が「ソ連邦における日本文学研究」の概要です。

（本稿は国際交流基金の招きで来日されたソ連邦科学アカデミー東洋学研究所レングラー支店日本科長

V.N.GOREGLIAD氏の昭和五六年五月二十二日当館におけるお話を原稿化したものである。

なお当日はこのあと懇談会が行われ、レングラー大学に寄贈された有栖川文庫の未整理の写本・木版本約四〇〇〇点があるなど当館の文献資料収集上も興味あるお話があったので、その部分を附記する）

……明治維新以後は、ゴシキエービチ駐日総領事が集めた写本・木版本を死後御家族からもらいました。またローゼンベルグが帝大に来ていた時集めた仏教関係の写本、木版本もあります。今のところ約三〇〇〇冊位です。そのほか朝鮮関係の中に日本の文献があり、その中にはアストンのコレクションが含まれています。

東洋学研究所の図書館以外では、レングラー大学の東洋学部の図書館に、有栖川文庫の写本・木版本が約四〇〇冊あります。これは一八八三年にアレキサンダー三世がツアーになった時もらったものです。その目録はまだできていません……。

海外資料収集のための

リスト・情報の入手について(お願い)

当館では今年度から、海外各地に伝存する国文学関係の資料(写本・版本等)をもマイクロフィルムで集めることになりました。そのためは、どこにどのようなものが伝存するか、具体的な情報が必要です。国立機関の性格上、次のような手続を踏まねばならないからです。

①先方所蔵書のリストまたは少くとも具体的な情報に基き、その中から年度内にマイクロフィルム化して納品することが可能なものを見積りを所蔵者に要請する。②その見積りが来たら正式に発注する。③先方で撮影してもらって年度内に納品を受ける。

具体的な情報を入手したく、特にリスト類(メモ・原稿の形で)をお持ちの方あるいはその所在を御存じの方は、ぜひ当館文献資料部まで御一報下さるようお願いいたします。

当方としても、古くは例えば大英博物館、近くはロンドン大学やストックホルム王立図書館など若干の刊行された目録については所蔵あるいは承知しており、またいくつかの箇所については現地で調査された研究者から提供を受けたリスト・情報類もありますが、この事業をできるだけ活発に行うために、内外の研究者あるいは所蔵者各位の御協力をお願いする次第です。提供して頂いた資料や情報は、日本における国文学研究の進展に寄与するばかりでなく、海外の日本文学・日本文化研究者をも益して国際協力の実をあげる手ばかりになると思います。

(文献資料部長 福田秀一)

北欧の旅

小山弘志

六月十二日より二十日間、ヘルシンキ・ラハティ(フィンランド)や、ストックホルム・パリに出かけて来た。その目的、出かけるに至るまでのことをはじめに記す。

五月二十日の夕方、国際交流基金より「国際作家会議(於ラハティ市)」に出席してほしい旨の電話があった。本務に直接の関係はないことだし、もともと出無精ではあり、その場で直ちにおことわりしようかと思っただけ、日時がさしせまってもはや他の人に交渉するゆとりがないようなので、諸否を保留して、翌日館長に御相談した。市古館長は事務当局などとお打ち合せ下さった上で、行く気があるのなら行ったらどうか、そして行くのなら、二三の都市での日本文学関係の文献調査を付け加えることにしては、という示唆を与えて下さった。

あらためて交流基金に問い合わせると、ラハティの会議には加藤周一氏の出席がすでに決まっているよし。同氏とは旧知の間柄である。また、ヘルシンキ在住のフィンランド文学研

究家大倉純一郎氏が会議の世話役の一人であることもわかった。同氏とは、昨夏帰国された折に二度ほど会っている。館長の意向に加えて、これらのことが私の気持を動かすことになった。そこで、文献資料部の福田部長にも相談して、ストックホルムの王立図書館、パリの国立図書館における調査を計画に加えることにし、館長に内意を申し上げたのが二十二日のことである。以後、事務局において交流基金との打合せや出張の手續きを迅速に運んでいたが、六月十二日に出発できることになった。

出発前の私自身の準備は十分とは言えなかった。大倉氏とは連絡が取れ、また加藤氏と同じ飛行機の手配もできたし、パリの国立図書館もパリ大学第七のビジョー教授の高配での日の約束ができたが、ストックホルムの王立図書館は片だよりになつてしまった。すなわち、東大の築島裕教授の紹介によりストックホルム大学の趙教授に手紙を出し、王立図書館の都合を問い合わせただくことをお願いしたのであるが、その返

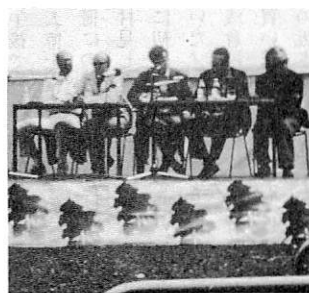
事を出発前にもらうことができなかったのである。また同図書館のノルデンシヨルド文庫の目録が最近日本でも発売されたことを知ったが、入手するゆとりがなかった。しかし、国際交流基金の当初の依頼に加え、当館の業務に関係のある二つの図書館における調査をも目的として、出張したのである。

フィンランドは「白夜」の季節であった。十四日(日)の夜、ヘルシンキにおいてフィンランド日本文化友の会主催の集りがあり、加藤氏は英語で日本文学の特長について話し、私はスライドを用いて能・狂言のことを日本語で説明し、大倉氏にフィンランド語に通訳してもらった。終了して会場を出たのは、たぶん午後十時ごろだったと思う。外は街灯の必要のないくらい明るいので、建物の屋根や上の方の窓が夕日に映えている。そして室内には電灯がともっているし、市電はライトをつけて走っている。これが「白夜」なのであった。

フィンランド滞在の十日間、雨の日が多かったが、曇っていても夜の十時ごろまでは、ほのかに明るい。とかく寝不足になりがちであった。

寝いたので自分で確めたのではないが、午前二時ごろには夜が明けると約二十時間以上が昼間ということになる。「白夜とは常昼(とこひる)なり」というのが、一旅人の感想である。

ラハティ市の「国際作家会議」は十五日から十八日までであった。十五日の午後、総勢約百人がヘルシン



ラハティの国際作家会議第一日。壇上の右から三日、加藤周一氏。

キよりバスで出発し、約二時間でラハティ市に着き、その夜、市長招待の晩餐会があり、翌十六日から三日間、近郊のムックランの、芝生の上ベンチを並べた会場で、発表と討論が行われた。テーマは「神話と文学」である。十七日午後より雨となり、あらかじめ設置されていた大天幕の中にベンチを持ち込んで続行されたが、三日間を通じて毛布が用意されているほどの寒さであった。会議は芬・英・仏語で、同時通訳を聞

くレシーバーが与えられてはいるものの、同時通訳自体がむづかしい仕事であるから、聞えて来ることはほぼ難解である。これを耳にあてていても、スピーカーからの発表者自身のことばも耳に入るので、いよいよ理解しにくくなった。一般にフィンランド語は語頭にアクセントがある。語尾の上がることの多いフランス語がいっしょになって聞えてくると、それは一種の音楽を聞いているようでもあった。

昼食時や夜などに数人のグループでの懇談が随時随所に行われ、このような場では私も加藤氏や大倉氏のそばで話に加わった。一般に言えることであるが、会議そのもののほかに、このような場での交流も甚だ有益である。

会議全体はフィンランドの若い作家たちによって運営され、プログラム記載外の、いわば無名の人たちの発表も適宜加えるなど、見事であった。一九六三年からは隔年に催されて今年が十回目である。日本からは前回（一昨年）に安部公房・矢内原伊作両氏が初めて参加した。今回の国外からの参加者は約五十名、その大半はヨーロッパ各国の人々で、アメリカ・カナダからの数人や南ア

フリカの作家とともに、東洋の日本からの参加者は遠来の珍客であった。次回以後も、適当な人の参加が望まれる。十日間滞在しただけであるがフィンランドの対日感情はたいへんよいという印象を受けた。この会議への参加や、さらにより一層の文化交流の行われることを期待したい。



スウェーデン王立図書館の書庫の中で、副館長とエドグレン氏(左端)と。

ストックホルムには二十三日午後に着いた。すでに趙教授よりヘルシンキに便りがあり、種々の連絡がついているよしであったので、安心してあった。到着・出発の両日を除き、三日間の滞在中は雨がちがちがたが、同教授の高配による日程に従って行動した。ヴァカンスの時期にもかかわらず、すべてが好都合に運ばれたのは幸運というほかない。実際、週日後には趙教授の北京への出発が予定されていた。

ストックホルム大学東洋語学研究所

所長趙承福教授は、東京大学出身で私と同時代の同窓である。四十年ぶりの再会という次第だが、実は当時ことばを交したことはなかった。ただ、共通の友人が多く、また二年前に東大と同大学との間に協定が結ばれたこともあって、二十四日朝ホテルに訪ねて来られた時から旧知同然の間柄になった。同教授の配慮により、滞在中ずっと、日本文学科の学生でスウェーデン人の和田夫人に案内や通訳などの労を取っていただくことになる。

と想像していただきたい。ただ異なるのは、そこで、それぞれの「生活」が営まれていることである。農家では牛を飼い、室内で機を織っている。硝子工場ではコップなどが作られている。番人であり説明者である、その土地その時代の衣服を着たおばさんが、案内して下さった館長ベレンツ博士と、冗談か何か言い合いながらにこにこ笑って握手している光景は、ほほえましいものであった。

二十四日は、午前には歴史博物館、午後にはスカンセン（野外博物館）に行った。歴史博物館では館長イサクソン博士と懇談したが、その研究部門は広大な建物のかんりの部分を占め、この方面の研究の一つの中心をなしているようであった。大学の数が少ないのだから、当然のこととも言えよう。折しも行われていたヴァイキング特別展示を瞥見した。その各室の「番人」は、その室の展示物について質問があれば、説明のできる人々であるとのことであった。

スカンセンは、広大な敷地に各時代各地の農家や教会などを数多く移築してあるもの、明治村の時代の幅をひろげて規模を大きくしたもの

午後である。副館長ローンストロム博士やエドグレン氏に会い、六千冊にのぼるノルデンシヨルド文庫を拝見した。これは、明治十二年九月に初めて北東航路を開いて横浜に着いたノルデンシヨルド卿が、東京の浅倉屋や京都の佐々木竹苞楼などで買い求めたもの、主として江戸時代の版本であるが、まれに写本類も存する。極めて保存良好、管理が行き届いている。副館長からはこのマイクロフィルムを資料館に提供していただくことの快諾を得た。また、その詳細な目録を編者エドグレン氏から頂戴した。東京で入手する暇のなかったことがかえって仕合せであったことになる。

旧市街の古い建物の地下レストラ



ビジョー家におけるフランク教授夫妻

ン、シェーラレン・デン・イルデーネ・フレーデンでの二十四日の昼食会では、趙教授の肝煎りでストックホルム大学総長ヘルムフリード教授（人文地理学。東大との協定の際、来日）やヨソソソ教授（文学部長）たちと欲談することができた。大きな酒樽がいくつも壁際に並べてあって、壁面の積み重ねられた石は黒ずんでいる、古い穴蔵である。蠟燭の明りでの食事はなかなか風情があった。ちなみに、このレストランはアカデミーの所有で、純益から若い詩人たちに賞金を出すのだという。

北欧の帰途、二十七日（土）にパリへ着いた。これも雨。気象台はじまって以来の冷夏のよし。二十九日に国立図書館へ赴き、小杉恵子氏に会って、日本文学関係の蔵書のマイクロフィルムを資料館に提供してもらう件につき、その了承を得た。この書物はデュレのコレクションなどが主体で、奈良絵本の類も少々存するけれども、大半は江戸末期の絵を主とした草紙類のようであった。

パリではビジョー教授や交流基金の岩淵功夫氏、旧友窪田開造・松本和夫、東大比較文学の大学院生小林康夫の諸君のお世話になった。近々にサンパウロに赴任する予定の旧知玉井乾介氏や、七月一日再開館を控えて多忙のバリ大学国際都市日本館長を勤めている新倉俊一君が訪ねてくれたし、ビジョー家での夕食にはフランク教授夫妻が来て下さった。松本君を交えての窪田家でのバリ最後の夜、大岡信君もその席に加わった。窪田夫人に、人に会うためにバリへ来たのか、と言われても否定できないような三日間であった。ルーヴルの中に入らず、ギメに行かず、ただ雨中の午後ビジョーさんと散策したマレ地区やモンマルトルの丘などが、パリの町の印象として残っている。

三十日、午後一時に出発するはずの飛行機がロンドンの管制塔のストライキのため遅れ、四時間以上、シャルル・ド・ゴール空港の待合室で待機していた時、窓の外は陽光燦々としていた。

新収資料紹介 ⑱

曾我物語（組合せ絵入古活字版）

十二冊。縦二十七cm、横二十cm。

一面十二行、一行二十一字。無匡、字高二十二、一cm。版心なく、各丁の前又は裏側のノドの隠れる部分に巻数と丁付（「十二冊三」の如し）を付す。前表紙は原を補修（但し巻

天理図書館の巻五までの端本（有彩）のみ。一部に伝聞された龍谷大学図書館には現存しない。青谿書屋・赤木文庫旧蔵。

曾我物語の古活字版は、管見に触れたもの十一種（異種字版を含む）。

三・五・七・八・十一・十二は裏表紙を流用、裏表紙は全て後補。巻六のみ原題簽（刷、無匡）を一部存する。巻七の第一―三丁、第五丁、巻八の第八丁を欠く他はほぼ完存（但し全葉裏打）と言える。なお巻六の第十二、十三丁は綴違える。絵は全部で二百一図の多きに達し、各絵が十個の部分の頻度の高い繰返しの場合から成立つ。所謂「絵活字」と称される所以。この手法は赤木文庫主人に依れば文禄年間刊の『高野大師行状図画』にのみ見られる。（『寛永行幸記』古活字版に同じ人物の版が繰返し使用されて巷間有名であるが、組合せとするに及ばない。）活字及び図版の摩耗度から見て少数数の印行なる事勿論で、同版の現存は

最先出は十行本（日本古典文学大系底本）であるが、それに写本（穂久迹文庫本・龍門文庫本系）本文を以て増補せる十一行本一種（龍門文庫に不完本あり）が他の古活字諸版の基となっている。この本は現存他版は介さず十一行本に繋るもので、この後出たる一枚板絵入十二行本（天理図書館に端本が存する）の本文から整版本最古版たる寛永四年整版本（無挿絵）が作られ、更にその後出版たる寛永頃刊無挿絵本に一枚板絵古活字本の絵の版本を流用して丹緑本が作られている。正保三年刊絵入本はその本の覆刻。その後刷り緑本と絵抜後刷本が世上に流布している。手法の珍奇のみならず本文展開上も重要な本である。（村上学）

国文学研究資料館評議員名簿

任期昭和五十五年七月一日、昭和五十七年六月三十一日

- 阿部秋生 実践女子大学文学部長 東京大学名誉教授
- 石井良助 創価大学法学部教授 東京大学名誉教授
- 伊地知鐵男 元早稲田大学文学部教授
- 白田甚五郎 国学院大学文学部教授
- 小田切進 立教大学文学部教授 日本近代文学館理事長
- 久曾神昇 愛知大学長 愛知大学理事長
- 児玉幸多 学習院大学名誉教授
- 小葉田淳 京都大学名誉教授
- 小林清治 福島大学教育学部教授
- 齋藤正 東京国立博物館長
- 佐藤喜代治 フェリス女学院大学文学部教授 東北大学名誉教授
- 谷山茂 京都女子大学長
- 手塚富雄 共立女子大学文学部教授 東京大学名誉教授
- 野間光辰 皇学館大学文学部教授 京都大学名誉教授
- 秀村選三 九州大学経済学部教授
- 古島敏雄 専修大学図書館長 東京大学名誉教授
- 宝月圭吾 東京大学名誉教授
- 松尾聰 学習院大学名誉教授
- 松田智雄 図書館情報大学長 東京大学名誉教授
- 山本達郎 東京大学名誉教授

昭和五十六年度

国文学文献資料収集計画委員会委員

任期昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日

- 井上宗雄 立教大学文学部教授
- 今枝愛真 東京大学史料編纂所長
- 大曾根章介 中央大学文学部教授
- 片野達郎 東北大学教養部教授
- 金井真之助 松陵女子学院大学文学部教授
- 木藤才藏 日本女子大学文学部教授
- 信多純一 大阪大学文学部助教授
- 鈴木勝忠 岐阜大学教育学部教授
- 松尾靖秋 工学院大学一般教育学部教授
- 宮次男 東京国立文化財研究所美術部第一研究室長

昭和五十六年度

文献目録委員会委員

任期昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日

- 浅井清 お茶の水女子大学教育学部教授
- 大矢武師 静岡大学教育学部教授
- 久保田淳 東京大学文学部助教授
- 小島孝之 立教大学文学部助教授
- 篠原昭二 東京大学教養学部教授
- 杉本邦子 昭和女子大学文学部助教授
- 會倉岑 青山学院大学文学部教授
- 浜野卓也
- 山口明德 東京大学文学部助教授

情報検索委員会委員

任期昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日

- 石綿敏雄 茨城大学教養部教授
- 稲岡耕二 東京大学教養学部教授
- 杉田繁治 国立民族学博物館研究部第五研究部助教授
- 照井武彦 国立歴史民族博物館情報資料研究部助教授
- 西村恕彦 東京農工大学工学部教授
- 堀内秀晃 東京医科歯科大学教養部教授
- 水谷静夫 東京女子大学文学部助教授
- 山本毅雄 図書館情報大学図書館情報学部教授

昭和五十六年度

国文学文献資料調査員

任期昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日

- 上岡勇司 北海道教育大学教育学部助教授
- 菊地仁 山形大学人文学部講師
- 佐藤聡 秋田大学教育学部講師
- 鈴木則郎 東北大学文学部助教授
- 豊島秀範 弘前学院大学文学部講師
- 名子喜久雄 北海道教育大学教育学部講師
- 廣瀬朝光 岩手大学人文社会科学部教授
- 松野陽一 東北大学教養部教授
- 石川了 大妻女子大学文学部講師
- 磯水絵 二松学舎大学文学部講師

板谷徹

早稲田大学演劇博物館助手

宇田敏彦 戸板女子短期大学助教授

小島孝之 立教大学文学部助教授

佐藤園久 群馬県立女子大学文学部助教授

杉谷寿郎 日本大学文学部助教授

鈴木淳 国学院大学日本文化研究所研究員

諏訪春雄 学習院大学文学部教授

棚橋正博 帝京大学文学部講師

千葉義孝 関東学院女子短期大学講師

徳田和夫 学習院女子短期大学助教授

徳田武 明治大学法学部助教授

中野沙恵 東京女子医科大学講師

中山尚夫 東洋大学文学部助手

中山右尚 共立女子短期大学助教授

延廣眞治 東京大学教養学部助教授

萩原恭男 大東文化大学文学部教授

林雅彦 明治大学法学部助教授

原道生 明治大学文学部助教授

牧野和夫 東横学園女子短期大学講師

(中 部)

安藤重和 愛知教育大学教育学部助教授

岡本勝 愛知教育大学教育学部助教授

嘉藤久美子 椋山学院大学講師(非)

久保木哲夫 都留文科大学文学部教授

櫻井治男 皇学館大学神道研究所講師

佐藤彰 静岡女子短期大学教授

沢井耐三 愛知大学教養部助教授

杉戸清彬 椋山学院大学文学部講師

田中喜美春 岐阜大学教育学部助教授

長友千代治 愛知県立大学文学部助教授

西村聡 金沢大学文学部助手

服部幸造 福井大学教育学部助教授

廣岡義隆 三重大学教育学部助教授

宮崎莊平 新潟大学文学部教授

和田博通 山梨大学教育学部講師

(近 畿)

井上博嗣 京都女子大学文学部教授

大槻修 甲南女子大学文学部教授

- 加美 宏 甲南女子大学文学部教授
- 阪口弘之 大阪市立大学文学部助教授
- 櫻井武次郎 観和女子大学文学部助教授
- 須山章彦 帝塚山短期大学助教授
- 関屋俊彦 関西大学文学部助教授
- 田中 登 帝塚山短期大学助教授
- 林 省之助 関西大学文学部助教授
- 肥田晴三 関西大学文学部講師(非)
- 廣田哲通 大阪女子大学文学部講師
- 藤田真一 追手門学院大学文学部講師
- 堀口康生 大阪女子大学文学部講師
- 増田繁夫 大阪市立大学文学部助教授
- 松原秀江 姫路短期大学助教授
- 三村晃功 花園大学文学部助教授
- (中国・四国)
- 糸井通浩 愛媛大法文学部助教授
- 稲葉二柄 香川大学教育学部助教授
- 小峰和明 徳島大学教育学部助教授
- 佐藤恒雄 香川大学教育学部助教授
- 松原一義 四国女子大学文学部助教授
- 松原秀明 金刀比羅宮図書館嘱託
- 弓削 繁 山口大学教育学部助教授
- 湯之上早苗 広島文教女子大学文学部助教授
- 横山邦治 広島文教女子大学文学部助教授
- 渡邊輝道 高知大学文学部助教授
- (九州)
- 今井正之助 長崎大学教育学部講師
- 江口正弘 熊本女子大学文学部助教授
- 河北 靖 北九州大学文学部講師
- 重松裕己 熊本女子大学文学部助教授
- 中野三敏 九州大学文学部助教授
- 米倉利昭 佐賀大学教育学部助教授
- 笠 榮治 福岡教育大学教育学部助教授
- (文献資料特別調査員)
- 阿部泰郎 元興寺文化財研究所研究員(非)
- 荒木 尚 熊本大学文学部助教授
- 小川 要一 東北大学教養部教授
- 片野達郎 山口女子大学文学部助教授
- 熊本守雄 山口女子大学文学部助教授
- 黒木祥子 大阪大学文学部助手

- 鈴木勝忠 岐阜大学教育学部教授
- 高橋伸幸 札幌大学女子短期大学部教授
- 檀上正孝 広島大学教育学部助教授
- 名和 修 (財)陽明文庫主事
- 門 清 松坂市市史編纂室員
- 昭和五十六年度
- 国際日本文学研究会委員会委員
- 任期 昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日
- 池田 重 千葉大学教育学部教授
- 井本 農一 実践女子大学文学部助教授
- 白田甚五郎 国学院大学文学部助教授
- 長谷川 泉 学習院大学講師(非)
- 任期 昭和五十六年八月一日、昭和五十六年十二月三十一日
- ドナルド・キーン コロンビア大学教授
- 昭和五十六年度
- 共同研究委員会委員
- 任期 昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日
- 秋山 虔 東京大学文学部助教授
- 稲賀敬二 広島大学文学部助教授
- 神保五彌 早稲田大学文学部助教授
- 田中 裕 南山大学文学部助教授
- 松崎 仁 立教大学文学部助教授
- 昭和五十六年度
- 古典籍総合目録委員会委員
- 任期 昭和五十六年四月一日、昭和五十八年三月三十一日
- 乙骨達夫 国立国会図書館収集整理部主任司書
- 菊地勇次郎 東京大学史料編さん所教授
- 黒住 武 東京工業大学附属図書館事務部長
- 堤 精二 お茶の水女子大学教育学部助教授
- 森川 彰 関西大学附属図書館運営課長
- 昭和五十六年度
- 共同研究員
- 任期 昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日
- 池田俊朗 京北高等学校教諭

- 尾形 仂 成城大学文芸学部教授
- 加藤定彦 立教大学一般教育助教授
- 雲英末雄 早稲田大学文学部助教授
- 久保田 淳 東京大学文学部助教授
- 谷地快一 東洋大学附属牛久高等学校教諭
- 中野沙恵 東京女子医科大学講師
- 三輪正胤 大阪府立大学総合科学部助教授
- 森川 昭 東京大学文学部助教授
- ※各委員会等の館内委員は省略
- 人事移動
- (昭和五十六年三月、昭和五十六年六月)
- (転入) 昭和五十六年四月一日付
- 文部教官(研究情報部教授) 小山弘志 (東京大学より)
- 文部教官(文献資料部教授) 棚町知弥 (長岡科学技術大学より)
- 文部教官(文献資料部助教授) 新藤 協三 (山梨大学より)
- (転出) 昭和五十六年四月一日付
- 文部教官(整理閲覧部助手) 永田 治樹
- (辞職) 昭和五十六年三月三十一日付
- 文部教官(文献資料部教授) 松田 修 (法政大学就職)
- 昭和五十六年四月一日付
- 文部教官(研究情報部教授) 古川 清彦 (昭和女子大学就職)
- (客員教授) 昭和五十六年四月一日、昭和五十七年三月三十一日
- 文献資料部 伊藤 正義 (大阪市立大学より)
- (併任) 昭和五十六年四月一日付
- 研究情報部長 小山弘志
- 文部教官(文献資料部助教授) 橋本朝生 (山梨大学より)

文献資料部事業報告

福田 秀一

昨年度の後半は当部にとつてほんとに多難であったが、幸い各方面の後協力によつて年度の事業計画も大過なく達成することができ、気分を新たに昭和五十六年度に入った。今年度も、調査・収集等ほぼ従来の方式で進みたく、引続き大方の御支援をお願いする次第である。

恒例に従つて、本年二月以降六月までに当部で行なつた主な事業を、日時を追つて報告する。

昭和五十五年度第二回国文学文献資料収集計画委員会の開催

二月二十五日、当館中会議室において開催、議事は左の通りである。

(一)昭和五十五年度文献資料調査収集概況について

当部より資料に基き、当年度の調査点数はすでに目標の七千点を突破していること、個々の所蔵者(図書館・文庫等)について見ると計画を見送つたものや当初計画外に追加したものの、計画点数をかなり大きく下したのものなどもあるが、それは予

算の制約による全体計画の修正や所蔵者もしくは調査員の突発的な事情による変更、あるいは新たな情報等による緊急の対応等の結果であり、かつ当初計画自体がそうした事態の可能性をも予測して余裕を見て立てられていたものであること、などを報告した。また収集点数は、当日の資料では目標の五千点を少々下回っていたが、その後の納品あるいは実行計画によつて目標の達成は確実にあること、ここでも計画との若干の相違は調査の場合と同様な事情によるものであることが報告され、調査・収集の両結果概況は異議なく了承された。

(二)昭和五十六年度文献資料調査収集計画について

当部より資料に基き説明があり、二、三の文庫の由来・実情等につき簡単な質疑応答があつた後、異議なく承認された。

(三)その他

1 今後の調査収集計画に対して、

沖繩資料やそれらの線でハワイ大
学宝玲文庫にも取り組むべきであ
るとの意見が出され、その他国内
の一、二の文庫につき示唆があつ
た。

2 調査・収集の視野はある程度広く取ること、また個人研究者が利用しにくい個人・寺社等がある程度優先すること、更に専門性を生かして協力を乞うよう留意すること、等の要望があつた。

3 所蔵者へのアプローチとして、東大史料編纂所等とも緊密な連絡をとり、所蔵者の迷惑を軽減するよう努力すべきであることが話し合われた。

「調査研究報告」第二号の刊行

当部において行なつた調査研究の成果を報告するため昨年創刊した「調査研究報告」の第二号を、五十五年度末に刊行した。

昭和五十六年度国文学文献資料収集計画委員の委嘱

本年度の収集計画委員として、再任五名、新任五名、計十名の方々を委嘱し、四月一日付で発令された(別項名簿参照)。

昭和五十六年度国文学文献資料調査委員の委嘱

本年度の調査員として、北海道

東北地区以下全国に計七十四名の方
々を委嘱した(別項名簿参照)。ほか
に特定事項についての調査・収集に
協力を仰ぐため、必要に応じて特別
調査員若干名を委嘱している。

昭和五十六年度第一回国文学文献資料収集計画委員会の開催

五月二十一日、当館中会議室で開催、議事は次の如くである。

(一)委員長の選出について

委員会規程により、木藤才藏委員を委員長に選出した。

(二)昭和五十五年度文献資料調査収集結果について

当部より資料に基き、本年三月末日で集計した標記の最終結果として、調査については海外(ケンブリッジ大学図書館、前号報告参照)を除き四八箇所七九一点を、収集は既成マイクロフィッシュ(東大図書館知十文庫)を含めて三〇箇所五一九

点を、それぞれ達成したことを報告し、了承された。因みに、調査に関して

しては本年二、三月に得た報告で前号分への追加となる箇所は、関西大学図書館(凱香園文庫)・大阪女子大学図書館(以上近畿地区)・今治市河野信一記念文化館(中国四国地区)の計三箇所である。また収集に
関しては、同じくその後の実行・納

品で前号分への追加となるのは、彰考館・学習院大学国語国文学研究室（以上関東地区）・刈谷市立刈谷図書館（中部地区）の計三箇所である。

（三）昭和五十六年度文献資料調査収集計画について

当部より資料に基き、去る二月の委員会で承認された内容にその後の事態によって若干の修正を加えたものとして、例年の通り多少の余裕を見込んで、五二箇所約八六五〇点、収集に関しては国内で二六箇所約五八四四点と海外で数箇所を計画している旨報告し、了承された。

（四）昭和五十七年度以降の文献資料調査収集の方針について

前回の議事の中にも出た、個人・寺社等の所蔵者にアプローチする手法や、予算の制約上無償を建前とせ

研究情報部事業報告

小山 弘志

本年四月に着任したばかりで、私としては業務の大体を知り得たという段階であるが、各室の室長はじめ室員諸氏の協力により、当部の事業は滞りなく遂行されつつある。

「昭和三十七年以前の研究文献の調査・収集・刊行」という臨時事業は、本年度が五ヶ年計画の三年目にあたる。編集室で作成しているその論文目録のためのデータは、一部をすで

ざるを得ないがその中でより有効な収集成果をあげ得る方法があるか等につき、活発な討議を行なった。

国文学文献資料調査委員会（総会）の開催

五月二十八日、当館大会議室において開催、前週の収集計画委員会承認された本年度の文献資料調査収集計画とその実施の方法を中心に討議が行われ、あわせて昨年度に改訂を行って本年度少修正を施した調査要領の説明が行われた。また地区別・文庫別に当部と分担調査員との間で計画実施の時間・方法等につき具体的な打合せも行った。それらの計画は、その後逐次実行に移され、本年度の調査・収集活動は目下順調に進んでいる。

（文献資料部長）

に電算機に入力しているが、その校閲の時期や修正の方法、研究者ファイルその他のファイル類の整備など、実際に目録を作り上げるまでには、作成方法においてまだいくつかの問題がある。今年度中には、これらの問題点を解決して、レールに乗せられるようにしなければ間に合わない。

また、後にも記すように、明年五月には情報検索システムの公開を試験的に行う方針が決まったので、そのための準備を着々と進めている。

以下、各室ごとの報告をする。

情報室

五月二十二日、国際交流基金の招きで当館に来られたソ連邦科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支部日本科長V・N・ゴレグリアー

ド氏を囲んで懇談会を催した。その時のお話をまとめたのが、本号掲載の「ソ連における日本文学研究について」である。前号のベルナル・フランク氏の「フランスにおける「日

本学」の展望」に続くものであり、今後機会があればこのような企画を行いたい。

本年の国際日本文学研究会は、従来の木・金の二日間を金・土の二日間に変更し、十一月十三・十四日

の両日に開催することとし、研究発表の募集を行った。

「新聞所載論文目録」は、昭和五十四年分より「国文学年鑑」（昭和五十六年三月刊）に掲載を開始したものであるが、その昭和五十五年分の整理をすでに修了した。

また、「昭和三十七年以前の論文目録」に付ける執筆者索引の作成に關し、その正確を期する必要もあつて、研究者ファイルのより一層の充実をはかるため、補充調査を実施している。

編集室

本年三月に、「国文学年鑑」（昭和五十四年分）と「国文学研究資料館紀要」七号とを刊行した。現在は昭和五十五年分の「国文学年鑑」を編集中心である。

「昭和三十七年以前の論文目録」の作成作業においては、本年度は二万点のデータ作成を目標として作業を進めている。

情報処理室

本年二月に、これまでに当館のコンピュータシステムに入力したデータの字種調査を行った。その結果、総字数は約一〇〇〇万字で五〇〇一種の「異り漢字」が出現していること、このうちJIS外で当館独自に

コード化した漢字の出現は三七一種であること、JIS第一水準の漢字は九六%の使用率になっていることなどが明らかになった。このデータと分析結果とは、『国文学研究資料館報告8号』(三月刊)に、「データ処理システムにおける漢字字種、一九八一年」のタイトルで報告した。

本年三月の第二十二回「情報処理学会」には、当室より、情報検索で二件、漢字処理で二件の研究発表を行った。

今年度のシステム開発は、古書目

整理閲覧部事業報告

本田 康雄

資料の受入・整理・閲覧各業務は、昭和五五年度も順調に進んだ。参考業務も利用者が増加しつつあり、展示・講演会等も充実している。

ところで、五五年度から始まった古典籍総合目録作成事業は、基本計画が定まり、本格的なデータ収集が始まった。この事業の目標は、古典籍総合目録およびその電算化されたデータベースの作成であるが、この事業を通して、現在重要な課題とな

録作成システムと語彙索引誌作成システムの二つの開発に着手した。また情報検索システム公開計画について、連絡協議会や情報検索委員会などの検討を経て、明年五月に試験的運用を行う方針が立てられたので、その準備をしている。

なお、オペレーティングシステムのVOS2からVOS3へのレベルアップが四月から五月にかけて行われ、現在順調に稼働している。

(研究情報部長)

っている学術情報流通の改善に対して、共同利用機関として積極的に貢献していくことが期待されている。

(一)整理閲覧室

閲覧室の利用者は、五五年度も一貫して増加しつつあり、大学図書館等を経由して申し込まれる相互協力サービス(文献複写、相互貸借)も急増してきた。共同利用機関としてのサービスを一層展開していくために、「共同利用のてびき」を印刷し

全国の関係機関に配布した。所蔵資料も着実に増加しつつあり、同時に所蔵資料の有効な利用をはかるための目録類(マイクロ資料目録等)も充実をはかってきた。新たに、当館所蔵の和古書目録を刊行するための準備を進めつつある。

(1)受入業務。昭和五五年度は、マイクロ資料(フィルム一、四五九リール、フィッシュ二五八枚、紙焼写真五、一八五冊)、図書(三、六一〇冊)、逐次刊行物(二、三二〇誌)その他の資料を受入れた。『逐次刊行物目録一九八一年』は、新規タイトル二七四誌を加え約二、二五三誌を収録した。

(2)古典籍総合目録作成事業。昭和五五年度は本事業の第一年度であり、基本計画の策定、システム設計、作業計画の作成等について、古典籍総合目録委員会、古典籍総合目録専門委員会が審議が行われた。本事業の中心となる古典籍書誌データ、所在データについては、約十七機関、約一万件の収集を行った。その他、書誌・所在データ収集のための基本データである所蔵者データ(三、三六六件)、所蔵目録データ(一、五〇〇件)の収集も行い、五十六年度には、古典籍所蔵状況の調査を行う予定で

準備を進めている。総合目録作成に合せて行う著者名典拠ファイルの作成について、情報処理室との協力のもとに、整理閲覧部をあげて詳細な調査を行った。この結果は、『国文学研究資料館報告』第7号に報告した。

(3)整理業務。「マイクロ資料目録一九八〇年」及び「初雁文庫目録」(『初雁文庫主要書目解題』に付載)が刊行された。マイクロ資料目録一九八一年作成のため、The British Libraryほか十七文庫、三、五〇〇件(七月一日現在)のデータ入力を行い、マイクロ資料の整理のほか、図書等の整理も定期的に進行している。また、『国文学研究資料館蔵和古書目録』(仮称、今年度刊行予定)作成のための準備にとりかかった。

なお、昭和五五年度貴重書指定小委員会において、『狭衣』(写)、『義経記(土佐少掾正本)』(刊)、『連歌新式追加并今案等』(写)、『羅生門物語』(写)、『節用集』(刊)、『倭玉篇』(刊)、『補軍記七之巻』(刊)、『曾我物語』(刊)の八点が貴重書に指定された。

(4)閲覧業務。五五年度の統計を見ると、入室者数が前年度比二五・六%増、登録者数一〇・八%増、複写件数三一・七%増となっている。いずれも安定した伸びを示しているな

かで、特に複写の伸びが顕著であり、件数こそ三一・七％増に止まっているものの、枚数(コマ数)・金額のうえでは五〇％を越える勢いである。雑誌・紀要類の年ごとの増加、マイクロ資料の着実な蓄積等資料の充実がこの伸びを支えているわけで、今後とも一層充実に図っていきたい。

定例の年度末蔵書点検を三月二十五日(三十一日)にかけ実施した。不明資料の数も最小限に止まりほぼ満足しうるものであった。『共同利用のてびき』相互協力サービス案内』が年度末に出来上り、全国の大学図書館等への発送も、一部を残しほぼ完了した。

相互協力の具体的な事務マニュアルを中心としたこのリーフレットは、特定・単独の機関から不特定多数の機関を対象としたものとしては、恐らく嚆矢をなすものである。(先行の類似のものは、地域的協力網の構成館内のものであったり、上部団体によるメンバー館向けのもので、しかも対象が限定されている)

共同利用機関としての当館にとっ

て、相互協力サービスを通じ全国の利用者の共同利用を促進してゆくことは、設立の根幹をなす理念であり、このリーフレットはその理念実現へ向けてのささやかな第一歩である。

(5)マイクロ室業務。五十五年度収集分のうち六五九リールの作業用ネガフィルムは五三三リール作製し、五十三年度収集分の後半の加工作業に入っている。紙焼写真本については、前期に引き続いて、『マイクロ資料目録一九八〇年』に収録されている三文庫一〇五リール分の紙焼写真を作製し、同じく五文庫二、六一二冊の紙焼写真本の作製を行い閲覧に供している。撮影業務では、所蔵資料九点のマイクロ資料化を行った。又、他に文献複写サービスとしての撮影が十六点、ポジフィルム三四点の作製をした。

(二)参考室

参考図書(参考開架図書)についてはP.14参照。質問への調査・回答、参考用資料の作成等、レファレンスを担当した。

一方、国文学の普及業務として、左記のとおり講演会、展示会を開催した。

●第十四回公開講演会(六月十三日、一時半)

大伴家持の歌 小野寛駒沢大学教授。萬葉の河蝦 止崎馨神戸大学教授。

●常設展示

江戸から明治へ——戯作と近代文学(その二) 二月二十三日(四月二十一日)

平安時代の文学 五月七日(七月七日)

なお、三月末に「国文学研究資料館講演集二」 「同館特別展示目録五」を刊行した。

四月一日付で永田治樹助手(受入係長併任)は東京大学情報図書館学研究センターへ転任し、受入係長として石井啓豊事務官が着任した。(整理閲覧部長)

国文学研究資料館公開講演会—創立十年記念—

秋山虔東京大学教授、佐竹昭広京都大学教授の両講師をお迎えし、次のとおり京都で開催いたします。

日時 五十六年十月三十一日(土) 一時半より

会場 京都会馆(京都市左京区岡崎最勝寺町)

昭和56年度科学研究費補助金

種別	研究代表者	研究課題	研究経費
一般研究(B)	伊井 春樹	逸翁美術館蔵国文学関係資料の総合調査と解題研究	900千円
一般研究(C)	岡 雅彦	江戸時代言語遊戯の調査研究	650千円
試験研究(2)	市古 貞次	国文学語彙検索システム及び索引誌の作成に関する研究	4,400千円

第5回国際日本文学研究集会のお知らせ

七月十三日(金) 研究発表・レセプション

七月十四日(土) 研究発表、講演ブルノ・レヴィン教授

会場 国文学研究資料館

用語 日本語、参加費 二千円

研究者カードによる

照会に対する御協力をお願い

当館では、国文学研究にかかわる共同利用機関として、研究文献を収集し、毎年国文学年鑑を発行するなど広く研究者の研究情報利用の便をはかつておりますが、これらの業務に関連し、国文学関係研究者の資料を整備することが必要となっておりま

す。そのため、昭和五十二年、当館の開館に際し、研究者カードによる照会にお答えいただくなど、すでに多くの研究者の方々の御協力をいただいておりますが、このたび特に現在作成中である昭和二十年から昭和三十七年に至る研究文献目録の執筆者索引のためにも研究者氏名の正確なヨミをはじめとする、より一層の資料の整備をせまられております。

そこで本年七月、関係各学会等の名簿にもとづき、前回（昭和五十二年）にカードをお送りいただかなかった約三二〇〇名の方々に研究者カードによりお名前のヨミ、現職、現住所等を照会し、御協力いただくこと

にいたしました。すでに多くの方々から御回答をいただき、大へん感謝いたしておりますが、もしまだ御返事いただいでい

ない方がございましたら、御回答いただければ幸いです。（このたびは、前回カードをお送りいただいでいる約三〇〇〇名の方々には改めて御照会いたしておりません。御了承ください。）

この資料は、これを公刊したり館外者に見せたりするものではありませんが、照会に応じて先方の必要とする事項を返答する場合がございます。したがって、もしそのような点についてお差支えのある箇所は御記入いただかなくても結構でございます。

なお、今後とも、現職、現住所等の御変更の際には、お手数でも当館に御連絡いただけるとまことに幸でございます。当館が内外の国文学研究者の共同利用の機関としての機能を果たしてゆけるよう、よろしくお願

いたします。

（連絡先）

〒一四二

東京都品川区豊町一―一六―一〇

国文学研究資料館研究情報部情報室

（電話）〇三―七七八―五七三二

共同研究

前号を受けて本年二月から六月までの主な活動として報告すべきことは、左のごとくである。

共同研究報告1の刊行

前号で予告したが、五十二年度以降の共同研究の成果の一端、特に初雁文庫に関するものに同文庫の目録〈当館整理閲覧室作成〉を付して「国文学研究資料館共同研究報告1、初雁文庫主要書目解題 付初雁文庫目録」と題して、本年三月末に明治書院から刊行した。

昭和五十六年度の活動

本年三月三日の共同研究委員会の決定により、五十五年度の共同研究員に引続き委嘱して、当館寄託久松本ならびに酒田市立光丘図書館の俳書の解題研究を仮称久松班・俳書班でそれぞれ継続した上、両班とも本年度をもって一応の結着をつけるべく、目下分担作業および討議を行なっている。なお、本年度の館内従事者は、福田秀一・新藤協三・棚町知称・渡辺守邦・島原泰雄・岡雅彦（官制順）の六名である。

（福田秀一）

評議員会議の開催

本年度第一回評議員会議が去る七月十七日（金）午前十時三〇分から当館中会議室において石井議長ほか十三名の評議員の出席を得て開催され、管理運営の概況、昭和五十七年度概算要求及び昭和五十六年度事業等について評議が行われた。

委員会日誌

- 5月11日 国際日本文学研究会委員会
- 5月21日 国文学文献資料収集計画委員会
- 5月28日 国文学文献資料調査員会議
- 6月4日 情報検索委員会
- 7月23日 文献目録委員会

※ 書の排架されている書架の番号を知ることができません。

(2)紙焼写真本

原資料を撮影したフィルムから印刷紙に焼付け、製本したものです。収集フィルムのうち約六割が紙焼写真本になっており、その数は約二万冊です。このすべてが二階閲覧室の一角に開架されています。紙焼写真本は、「和歌」、「物語・小説」等の19のジャンルに分類され、同じジャ

利用者へのお知らせ

◆開架資料について

当館では、利用者が資料にアクセスする方法として、基本的には閉架式を採用しています。この方式は一般に資料の閲覧場所と排架場所とが分離しており、利用者はカード体や冊子体の所蔵目録で必要な資料を検索し、コールスリップ（請求票）によってカウンターに請求し、それを受けて担当者が排架場所から資料を取り出してきて利用者に渡す、という手順になります。（当館で必要な資料を捜し出すための所蔵目録等のツールについては前回簡単に説明しました）

一方の開架式は、利用者が直接、自由に資料へアクセスできる方式で、一般に閲覧場所と排架場所が接続もしくは同一のスペースに配されているものです。

この二つの方式には、各々一長一短がありますが、利用者にとっては開架式の方がはるかに便利であることは言うまでもありません。従って当館では、基本的には閉架式を採用しながら、可能な限り開架資料を増やすべく努めています。以下、当館開

覧室内の開架資料について紹介します。

(1) 参考開架図書

- ◆三階の参考閲覧室に開架されている資料です。いわゆる参考図書その他、一通りの注釈作業ができるように、定評のあるテキスト類、校本・注釈書、歴史・宗教等関連分野の基本的資料に及び、参考図書的な利用が期待される資料はかなりの程度網羅されています。内容・形式上の区分、該当資料例及び数量は次の通りです。
- ◆書誌（各種目録等） 約八三〇冊
 (例)『国書総目録』
- ◆辞典・事典 約九九〇冊
 (例)『倭訓栞』、『古事類苑』、『源氏物語辞典』
- ◆年表・文学史 約七〇冊
 (例)『歌舞伎年表』、『日本文学全史』
- ◆要覧・索引 約三五〇冊
 (例)『国文学便覧』、『国歌大観』
 『今昔物語集文節索引』
- ◆解題研究・校本注釈 約七〇〇冊
 (例)『平家物語全注釈』、『校本万葉集』

◆講座類

(例)『講座日本文学』

◆叢書

(例)『日本古典文学大系』、『群書類従』、『古典文庫』、『天理図書館善本叢書』、『日本随筆大成』

◆近代

(例)『明治文学全集』、『折口信夫全集』

◆漢文

(例)『国訳漢文大成』

◆思想・宗教

(例)『日本思想大系』、『大日本仏教全書』、『大正大藏経』

◆歴史・有職故実

(例)『大日本史料』、『新訂国史大系』、『新訂故実叢書』

◆風俗・地誌

(例)『生活の古典双書』、『大日本地誌大系』、『新修京都叢書』

◆書・絵画

(例)『日本書蹟大鑑』、『日本絵巻物全集』

以上約九千冊あります。これらの参考開架図書には、カード目録上に「参考」のスタンプがあり、前記の区分は図書のラベルに表示されています。また、参考閲覧室備え付けの書名カード目録によって、各々の図

ンル内は受入順に排架されています。ジャンルを示すアルファベット一字とその中の受入順一連番号が請求記号になります。（例えば、市立米沢図書館蔵の「源氏物語」の紙焼写真本請求記号は「E-1147」です）請求記号がそのまま排架位置を示していますので、特定の作品を捜す場合はあらかじめ、「マイクロ資料目録」で請求記号を調べる方が効率的です。

(3) 逐次刊行物

開架されている逐次刊行物は二つに分れます。一つは最近号のみの開架であり、もう一つはバックナンバーから最近号まで、所蔵するすべてを開架しているものです。前者は国文学関係の論文が収載されている、大学の紀要類、学協会誌等を中心に約六〇〇タイトル、後者はその中から、利用頻度を考慮して選ばれたタイトルです。逐次刊行物目録（閲覧室備付分）には、それぞれ「開架」、「全冊開架」と表示されています。最近号開架分は一定冊数に達すれば製本し、閉架扱いになります。が、どの号までが開架されているかは雑誌によって異なりますので、「開架」の表示があるものは開架場所を確認し、ない場合にはカウンターに請求していただくこととなります。

昭和五十六年度秋季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会提出は五十音順、以下①事務局 ②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

- 解釈学会①下一七〇豊島区北大塚三
 一八九二教育出版センター内②
 一〇月三―四日③愛知大学（豊橋校舎）
 近代語学会①下一五四世田谷区太子堂一七昭和女子大学内
 国語学会①下一〇一〇千代田区神田錦町三一―武蔵野書院気付②一〇月二四―二五日③広島大学
 古事記学会①下一五〇渋谷区東四一〇一―二八国学院大学日本文化研究所第六研究室内
 古代文学会①下一七三板橋区双葉町四一―九古橋信孝方
 上代文学会①下一五七世田谷区成城六一―一二〇成城大学文芸学部国文学研究室内②一〇月一四日③早稲田大学（視聴覚教室）

説話文学会①下一二二文京区白山五一二八―二〇東洋大学文学部国文学研究室内②二月五日③同志社大学
 全国国語国文学会①下二一四崎市多摩区生田四七六専修大学文学部国文学科研究室内②一〇月三―五日③岡山大学

- 中古文学会①下六六三西宮市池開町六―四六武庫川女子大学国文学研究室内②一〇月二三―二五日③梅光女学院大学
 中世文学会①下一五〇渋谷区東四一〇一―二八国学院大学徳江研究室内②一〇月二四―二六日③中央大学
 日本演劇学会①下一六〇新宿区西早稲田一―六一早稲田大学演劇博物館内②一〇月八―一〇日②那覇市、市立中央公民館ホール
 日本歌謡学会①下一五〇渋谷区東四一〇一―二八国学院大学文学部第五研究室内
 日本近世文学会①下一〇三〇千代田区三番町一二大妻女子大学国文学研究室内②一〇月一四―一六日③就実女子大学

女子大学

- 日本近代文学会①下一六〇新宿区西早稲田一―六一早稲田大学教育学部一〇二六研究室内②一〇月三―四日③北海道大学
 日本口承文芸学会①下一五〇渋谷区東四一〇一―二八国学院大学文学部第五研究室内
 日本文学協会①下一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇②一〇月一七―八日③専修大学（神田校舎）
 日本文学風土学会①下一五四世田谷区太子堂一―七昭和女子大学国文学研究室内②一〇月二八日③専修大学（神田校舎）
 日本文芸研究会①下九八〇仙台市川内東北大学文学部内②一〇月一四日③東北大学文学部
 俳文学会①下一九二―〇三八王子市東中野七四二中央大学文学部三三八三三号研究室内
 表現学会①下四八〇―一〇二愛知県長久手町大字長湫字片平愛知淑徳大学文学部国文学科研究室内
 仏教文学会①下一二二文京区白山五一二八―二〇東洋大学短期大学日本文学研究室内。（西部事務局）
 六〇〇京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一―花園大学国文学研究室内
 万葉学会①下五六四吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内②一〇月一七―二〇日③京都女子大学
 美夫君志会①下四六六名古屋市中昭和区八事本町一〇―一―二中央大学文学部国文学研究室内
 和歌文学会①下一〇一〇千代田区神田神保町三―二七共立女子大学四〇九国文研究室内②一〇月一七―一九日②徳島文理大学

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料（切手）を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報 第十七号
 昭和五十六年九月発行
 編集・発行者

国文学研究資料館
 東京都品川区豊町一―六六一〇
 郵便番号一四二
 電話（七八五）七―三三一（代）
 印刷所 株式会社 三興